

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：35410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370257

研究課題名(和文) 出雲文化圏における椎の本花叔の文芸事蹟と交流実態に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Literary achievement and Actual conditions of Interaction of Shiinomoto Kasyuku in the Izumo Culture Area

研究代表者

山崎 真克 (YAMAZAKI, MASAKATSU)

比治山大学・現代文化学部・教授

研究者番号：10342544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：島根県立図書館に寄託される比布智神社春日家文書を主な対象として、椎の本花叔を中心とした春日家の人物の文芸活動の事蹟がうかがわれる資料について、詳細な調査・収集を行った。特に『雲陽人物誌』ほかの花叔著作について個別に内容を分析することで、出雲文化圏における椎の本花叔の文芸事蹟とその交流の実態に関する研究を行った。

研究成果の概要(英文)：A detailed investigation collected the Hifuchi shrine Kasuga's documents performed deposition of by the Shimane Prefectural library about the document that evidence of the literary achievement of the person of the Kasuga's around Shiinomoto Kasyuku was indicated as a main object. In analyzing contents individually in particular about "Unyojinbutsushi" other Writing of Kasyuku, I performed a study the literary achievement and Actual conditions of Interaction of Shiinomoto Kasyuku in the Izumo Culture Area.

研究分野：日本文学・近世文学

キーワード：出雲文化圏 椎の本花叔 雲陽人物誌 出雲歌壇 データベース 河本家稽古有文館

## 1. 研究開始当初の背景

『古事記』『日本書紀』に記載された素盞鳴尊(スサノヲノミコト)の歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」により、『古今和歌集』仮名序に「人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ三十文字あまり一文字はよみける」と記されるなど、出雲は和歌発祥の地として知られる。ところがこれまでの研究では、記紀に収められた神話時代の伝承や『出雲国風土記』、あるいは明治期の小泉八雲について関心が寄せられることが多く、この地の歌壇において行われた活動の実態はあまり解明されていないのが現状である。

早くに原青波(義亥)氏『出雲歌道史』(風明荘 1940.11)が上梓され、その後、小原幹雄氏『島根和歌の旅』(松江 今井書店 1965.6)、小原幹雄・伊沢元美氏『出雲・石見文学風土記』(園山書店 1972.12)、小原幹雄氏『島根の和歌を訪ねて』(松江 今井書店 1998.10)などが発表された。これらはいずれも、明治以降の出雲の和歌活動については豊富な資料を駆使して記述しているものの、それ以前の記述はあくまでも概略を述べるに留まり、貧弱と言わざるを得ない。広汎な歌書の収集が困難などの資料的な制約が大きいものと考えられる。

一方で、近年、上野洋三氏・井上敏幸氏などにより、大名家の文事に関する実態など、文庫調査に基づいた江戸期の地方歌壇に関する研究が進んでいる。応募者は、山陰地方に現存する資料調査に基づき、出雲松江藩松平家(特に第二代藩主松平綱隆とその側室養法院について)の和歌事蹟に関する研究を進めてきた(拙稿「河本家稽古有文館蔵『山水』について 江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟」『古代中世国文学』第22号 2006.6他)。

江戸後期の出雲歌壇に関しては、歌書の掘り起こしをふまえた研究が蘆田耕一氏により精力的に進められている。蘆田耕一・蒲生倫子氏『出雲名所歌集 翻刻と解説』(ワン・ライン 2006.6)、蘆田耕一氏『出雲国の四歌集』(私家版 2007.10)では、出雲大社の神官である富永芳久編の歌集が取り上げられた。これらの歌集については、中澤伸弘氏『徳川時代後期出雲歌壇と國學』(錦正社 2007.10)にも詳述される。また蘆田耕一氏『江戸時代の出雲歌壇』(今井出版 2012.3)には、江戸時代を通じた出雲歌壇の活動が概説されている。

応募者は、島根大学法文学部山陰研究センターの「山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト」「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」に客員研究員として参加し、蘆田耕一氏・原豊二氏とともに『類題八雲集』

翻刻・解説と作者索引(私家版 2009.1)を上梓した。出雲大社第七十八代国造である千家尊孫編のこの歌集は、三百四十人の作者がすべて出雲国人と考えられる類題和歌集

であり、天保十三年(1842)の刊行は全国的な地方歌壇の盛行の流れの中でも初期に位置する貴重な資料である。

また、国文学研究資料館の基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(平成23~25年度)に参加し、島根県出雲市の手銭家蔵書について、当主を中心とした人的交流の面からの調査研究に携わってきた。

この成果をふまえ応募者は、平成22~24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの構築とその研究」により、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築するための研究を進めてきた。具体的には、『類題八雲集』の「作者索引」を基礎データとし、江戸後期に刊行された類題和歌集など関連歌書の調査・収集を行った上で、出雲歌壇を構成する歌人についての人物情報(姓・別称・身分・所在地・血縁関係・師弟関係など)を抽出することによりデータの拡充を行い、それを整理してデータベース化を図るものである。

今後も山陰地方に現存する資料調査を通して、関連する歌書の収集・内容分析およびデータベースの更新を継続して行うことにより、江戸後期出雲歌壇の実態を解明することが研究の全体構想である。

## 2. 研究の目的

江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築することで、歌壇の全体像を広く把握することがある程度できるようになった。これに加えて、今後は和歌に関する事蹟だけでなく、俳諧その他の文芸活動に携わった個別の人物・資料についての分析を進める必要がある。それは、和歌・俳諧双方に関わるような複層的な営みこそが当時の実態であり、出雲歌壇のみならず「出雲文化圏」の解明につながるからである。

そこで注目したのが、比布智神社(現島根県出雲市下古志町)の神職で、俳人としての事蹟が残る椎の本花叔(春日盈重)である。花叔は、文政六年(1823)出雲国を中心とした文化人に関する情報をまとめ、『雲陽人物誌』(島根県立図書館蔵)を著した。この資料には、和歌・俳諧・漢詩・書・画・茶事・囲碁ほか、多岐にわたる分野で功績のあった人物が採録されている。これらの人々の情報を収集し、また実際に交流もあった花叔は、出雲文化圏の実態解明を目指す上で、指標とするにふさわしい人物と言える。よって本研究は、島根県立図書館に寄託される比布智神社春日家文書を主な対象として、椎の本花叔の文芸事蹟とその交流の実態を明らかにし、出雲文化圏の解明に資することを目的とする。

江戸期の出雲俳壇および椎の本花叔については、桑原視草氏『出雲俳句史』(私家版 1937.9)、『出雲俳壇の人々』(だるま堂書店

1981.8)以来、本格的に取り組んだ先行研究が見当たらない。構築した江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの情報に、椎の本花叔を指標に据えた出雲俳壇の状況を加え、出雲文化圏全体を視野に入れて実態解明を目指す点に、本研究の特色と意義が存する。

### 3. 研究の方法

島根県立図書館に寄託されている比布智神社春日家文書の書誌情報をデータベース化した。データベース化した資料のうち、椎の本花叔を中心とした春日家の人物の文芸活動の事蹟がうかがわれるものについて、詳細な調査を行った上で内容を分析した。特に、『雲陽人物誌』や紀行文・発句集などの花叔の著作を中心に検討を進めた。

また、国文学研究資料館の基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(平成23年度～25年度)に参加するなかで調査する機会を得た。島根県出雲市の手銭家蔵書には、花叔の短冊や追悼句集等が存する。豪商として知られる手銭家の蔵書を手がかりとして、手銭家と姻戚関係のある広瀬家の人物をはじめとした出雲文化圏の人々と花叔との交流の実態を明らかにした。

以下、各項目に分けて詳述する。

#### (1) 比布智神社春日家文書の書誌情報をデータベース化

島根県立図書館に寄託されている比布智神社の神職、春日家の文書の書誌情報をデータベース化した。『比布智神社文書目録』(島根県立図書館編 2003.3)として既に公刊されているものに加え、未発表の状態である残りの資料についても、島根県立図書館のご了解を得て目録カード情報を入手し、データ化した。これらの作業は、Excel・MIFESなどの表計算・エディタソフトを用いて行った。

#### (2) 比布智神社春日家文書の調査・収集

データベース化した資料のうち、椎の本花叔を中心とした春日家の人物の文芸活動の事蹟がうかがわれるものについて、詳細な調査を行った。特に、花叔の著作である紀行文や、実作が収められた発句集などについて重点的に調査を進めた。これらは、調査先でノートパソコン・デジタルカメラを用いて撮影するなどして資料収集を行った。

#### (3) 椎の本花叔編『雲陽人物誌』ほか花叔著作の内容分析

調査・収集した資料のうち、まずは花叔の著作を対象として、人物誌・紀行文・発句集などからうかがわれる文芸活動の事蹟について個別に内容の分析を行った。

花叔編『雲陽人物誌』(島根県立図書館蔵)

については、既に全頁撮影および翻刻が完了し、私家版として活字化を行っていた。末尾に存する自伝的部分には、幼年期からの囲碁・俳諧の学び、名古屋の井上士朗門としての諸土との交遊、諸国遊歴の有様や、晩年の故郷での生活が語られる。こうした記述や、採録された人物情報についての裏付け作業を通して、花叔の事蹟とその交流の実態を考察した。『俗記 橘隠独行記』『癸亥紀行』などの紀行文、『椎之本発句集』などの著作についても同様の作業を行った。

#### (4) 花叔および春日家の人物に関わる資料の内容分析

比布智神社春日家文書のなかには、「椎の本」「花叔」「橘隠」などの花叔の印記や署名がみられるものが、人名録関係書・囲碁関係書や文書類などに存している。これらは花叔が書写もしくは所蔵していた資料と考えられる。この他、花叔の父紀重や兄易重(信風)など春日家の人物の名がみえる資料も多く存する。これらの資料により、花叔を中心とした春日家の蔵書形成のあり方も視野に入れつつ、出雲文化圏の人々との交流の実態を考察した。

#### (5) 手銭家蔵書(島根県出雲市)の調査・分析

島根県出雲市の手銭家蔵書には、手鑑に貼られた花叔の短冊や、花叔編の発句集、花叔が序文を記した追善集など花叔に関連する資料が存する。これらの資料を調査し、手銭家と姻戚関係があり、江戸中期以降出雲俳壇の中心となった広瀬家の人物(百羅・浦安・茂竹)をはじめとする出雲文化圏の人々と、花叔との交流の実態についての分析を行った。

#### (6) 近隣諸国を範囲とした人的交流の解明

出雲のみならず安芸・備後・伯耆などの近隣諸国を範囲とした人的交流の解明に資するための調査・考察を行った。

### 4. 研究成果

本研究は、島根県立図書館に寄託される比布智神社春日家文書を主な対象として、椎の本花叔の文芸事蹟とその交流の実態を明らかにし、出雲文化圏の解明に資することを目的とする。研究の成果は以下の通りである。

#### (1) 比布智神社春日家文書の書誌情報をデータベース化

島根県立図書館に寄託されている比布智神社の神職、春日家の文書の書誌情報をデータベース化した。古典籍に加え神社経営に関

わる文書を多く含む寄託資料は全 1530 点に及ぶが、このうち 436 点については『比布智神社文書目録』（島根県立図書館編 2003.3）として既に公開されているものをデータ化した。また、未発表の状態である残りの資料については、島根県立図書館のご了解を得て入手した目録カード情報に基づき、「番号・標題・年代・西暦・作成・宛名・刊写・形態・数量・備考」の項目ごとにデータ化の作業を行った。

## (2) 比布智神社春日家文書の調査・収集

データベース化した資料のうち、椎の本花叔を中心とした春日家の人物の文芸活動の事蹟がうかがわれるものについて、調査を行った。特に、花叔著作の『俗記 橘隠独行記』『癸亥紀行』などの紀行文、花叔の実作が収められた『椎之本発句集』などについて重点的に調査を進めた。

また、『雲陽人物誌』については、佐太神社（島根県松江市）所蔵の朝山皓氏書写本の調査・収集を行った。該本の書写は、既に私家版として活字化した島根県立図書館蔵本と、他の島根大学附属図書館桑原文庫蔵本・大阪市立大学学術情報総合センター森文庫との中間に位置するため、校合作業によって本文書写の段階が明らかとなった。

## (3) 椎の本花叔編『雲陽人物誌』ほか 花叔著作の内容分析

『雲陽人物誌』にみられる花叔の自伝的部分の意義について考察した。『雲陽人物誌』下冊にあたる「坤」全二二丁のうち、一二丁表～一七丁裏の六丁分を占めるこの部分は、上冊にあたる「乾」をあわせて二六一名分が採録される人物情報の中で、極めて異例の長さを持つ。また、他の人物と同様に「氏・名・通称・号」「血縁関係」を述べた上で、幼年期からの囲碁・俳諧の学び、諸士との交遊、諸国遊歴の有様を語り、五十歳の春を迎えた故郷での現在の生活をふまえて、本書執筆の動機を述べる。こうした配列や内容の分析・整理を通して、本書における花叔の自伝的部分の意義を明らかにした。

『雲陽人物誌』坤（全二二丁）の一丁裏には、丁の途中が約七分空白となる部分がある。その後の一二丁表から一七丁裏まで、「花叔」の自伝的部分が続く。この部分は、以下に示すように内容的に大きく三つに分けられる。

A 基本的な人物情報…氏・通称・血縁関係・幼名・実名・番号・号

B 「説話」…幼年時から現在に至るまでの経歴

幼年時、獅子門の俳諧を学ぶ。  
故郷を離れ、江戸に上り囲碁を学ぶも、

途中で断念する。

江戸で蕉門雪中庵に俳諧を学ぶも、途中で断念する。

諸国を巡った後に、信濃国善光寺において再び俳諧を学ぶ。

信州飯田に赴き、名古屋の井上士朗に入門して俳諧を学ぶ。

諸国を行脚して交流を図るが、兄からの消息を契機に帰国の途につく。

木曾・名古屋・伊勢・浪花などを経て、父の死後に帰国する。

旧知との交遊が懐かしく、飯田他の各地を旅する。

故郷に庵をむすび、旅に明け暮れる生活をやめて、これまでの行いを書き記す。

## C 「附録」…花叔自身の著作（二種の紀行文）についての言及

Aの部分には、他の人物の場合にも記されるような基本的な人物情報の項目がみられる。B・Cの部分は、それぞれのまとまりの冒頭に、やや薄い墨書によって「説話」「附録」と小字にて書き入れられている。またBの部分のみ、他より一字分上げて記されている。幼年時から現在に至るまでの経歴が書かれたBの部分を、内容によりさらに～に分け、概略を示した。

Bの部分は、幼年時に中島魚坊に入門して俳諧を学んだことから書き起こし、囲碁の服部因徹・井上因碩、俳諧の雪中庵といった師と仰いだ人物などを具体的に示しながら、これまでの学びと挫折の歩みを記述する。さらに諸国遍歴の後、井上士朗に入門し、門下を中心とした俳人たちと盛んな交遊を重ねたことを、具体的人名を示しながら述べている。

帰国後も各地を旅して、俳諧を通じた交流を続けたことを述べる。そして旅に明け暮れる生活をやめ、五十歳の春を迎えた故郷での現在の生活をふまえて、「是までの行状のうろ覚えなるをところ飛ばしに書とめて、忘れなん後の便と思ふのみ」（修正本文）と記す。

「附録」とするCの部分は、の帰国の旅について記した享和元年（一八〇一）もしくは同二年（一八〇二）『俗記 橘隠独行記』、およびの諸国遊歴の旅を記した享和三年（一八〇三）『癸亥記行』という、花叔著作の二種の紀行文の存在への言及である。

Bの部分において、挫折した体験も含め、師と仰いだ有力な人物名を明記し、さらには現在は出雲国在住ながら他国の有力な俳人とも親密な交流を保ち続けてきた経歴を示すのは、自分が『雲陽人物誌』に採録されるにふさわしい文化人であるとの自負を抱いていたためではないか。芭蕉の句をふまえた「椎の本」という庵名からも、そうした意識がうかがえる。

また、そうした自分だからこそ、広く出雲国ゆかりの人物を採録した本書を編纂するにふさわしいという意識があったとも思われる。とするならば、自伝的部分は単に自身の経歴を振り返るだけの意味を持つのではなく、編者たる資格を持つ自身を規定することで、本書全体の跋文に相当する性格を有すると言える。

と同時に、前述した「是までの行状のうろ覚えなるをところ飛はしに書とめて、忘れなん後の便と思ふのみ」という自己の歩みを書き残したいという欲求が、『雲陽人物誌』自体の成立の大きな要因となっていたことを示す内容であると考えられる。

#### (4) 花叔および春日家の人物に関わる資料の内容分析

比布智神社から島根県立図書館に寄託された資料は、「比布智神社文書」として一五三〇点所蔵保管されている。このうち、『雲陽人物誌』以外にも、「椎の本」「花叔」「橘隠」などの印や署名があり、花叔が書写、もしくは所蔵していたと考えられる文献が存する。

この中には、自伝的部分Cの部分に言及された『俗記 橘隠独行記』『癸亥記行』などの花叔自身の著作も含まれるし、『雲陽人物誌』編纂の参考として使用されたと思しき先行する人名録関係の資料もみられる。また、自伝的部分B でふれた囲碁関係のものはじめ、書状・文書類、小謡や和歌・古典籍など、資料の内容は多岐にわたる。

〔「比布智神社春日家文書」花叔関係文献〕

- a 人名録関係
- 693 江戸当時 諸家人名録  
表紙見返し・刊記「椎の本」印
  - 695 名家書画墨跡誌 文化十三  
表紙「椎の本秘録」
  - 711 近世畸人傳拔書 天明八・六  
表紙「椎の本」
  - 957 誹家人名録拔書二  
表紙「椎の本」
  - 987 日本詩選作者姓名録拔書  
表紙「椎の本」
  - 996 誹諧名家録 表紙見返し「花叔」
  - 1002 隠士録 表紙「橘隠花叔」
- b 花叔の著作
- 160 俗記 橘隠独行記 橘隠花叔
  - 161 癸亥記行 上・中・下 橘隠花叔
  - 930 椎之本発句集 天
- c 書状・文書
- 171 〔書状〕 椎のもとの花叔
  - 172 〔金三朱集方一件二付書状〕  
二三日 花叔
  - 285 〔書状〕 月五日  
江戸白猿 花叔宛

- 854-13-1 宗門證状之事 享和二  
(春日猪之助逗留之処帰国二付)
- 854-13-1 住居證状之事 享和二・八

- d 囲碁関係
- 732 〔碁罫譜〕 文政三  
裏表紙見返し「春日己千」
  - 734 文化打碁集 一  
表紙見返し「花叔写之」
  - 742 〔包紙〕(雲陽囲碁見立角力)  
包裏書「初 橘隠選」

- e その他
- 701 祝言小謡 寛政三  
裏表紙見返し「春日盈重」
  - 708 徒然草拔書 表紙「橘隠」
  - 710 華實年浪草拔書 表紙「椎の本」
  - 714 本朝食鑑拔書 表紙「椎の本」
  - 716 椎之本 草花録 天
  - 936 古歌備忘一 表紙「橘隠花叔」
- 通し番号は、島根県立図書館作成『比布智神社文書目録』に拠る。

#### (5) 手銭家蔵書(島根県出雲市)の調査・分析

島根県出雲市の手銭家蔵書には、手鑑に貼られた花叔の短冊や、花叔編の発句集『椎のもと』(無心斎一釣序・日々庵浦安跋)、花叔が序文を記した手銭有秀追善集『追善 華壘栗』(日々庵浦安編)、花叔三回忌追善集『夢路の葉桜』(亡千・東廬・楽二・日々庵浦安編)等の資料が存する。これらの資料については、伊藤善隆氏(立正大学)による考察・翻刻紹介が行われている。

出雲大社の社家であった広瀬家は、手銭家と姻戚関係にある。出雲大社周辺の俳壇の中心的存在であった広瀬百蘿息の浦安および手銭家五代当主有秀と交流が深く、ともに活発な活動を行う花叔は、出雲俳壇において大きな影響力を有していたと考えられる。

#### (6) 近隣諸国を範囲とした人的交流の解明

出雲のみならず安芸・備後・伯耆などの近隣諸国を範囲とした人的交流の解明に資するため、広島県立歴史博物館に寄託される国重要文化財「菅茶山関係資料」のうち、和歌・俳諧を中心とした文学関係の古典籍を対象とした調査を行った。

また、鳥取県東伯郡河本家稽古有文館の和歌資料を中心とした調査・考察を行い、その結果をふまえて「河本家稽古有文館シンポジウム」にパネリストとして参加した。

椎の本花叔との直接の関連性を示す資料を見出すことはできなかったものの、歌書・俳書の流通実態などを勘案すると、江戸後期においては、中国地方にとどまらず全国的な人的交流を伴う知のネットワークが形成されていたと考えられる。

## (7) 今後の展望

データベース化した比布智神社春日家文書の書誌情報を、既に構築した江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースと統合させることで、さらなる出雲文化圏の解明へとつなげることができる。

また、今後も比布智神社春日家文書の調査・分析を進め、出雲俳壇における椎の本花叔の位置づけについて継続的に考察する。それとともに、さらに佐太神社(鳥根県松江市)文書をはじめとした周辺の寺社史資料を対象を拡大し、出雲文化圏全体を視野に入れた調査・考察を行う必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

山崎真克、江戸後期類題集における出雲歌人の入集状況 出雲歌壇人物データベースの構築に向けて、古代中世国文学、査読無、第26号、2016年、pp.10~18

山崎真克、椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義、山陰研究、査読有、第8号、2015年、pp.128~138  
<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/journal/L-SSR/8/--/article/34896>

[学会発表](計1件)

山崎真克、河本家古典籍の和歌関係その他資料と蔵書形成、河本家稽古有文館シンポジウム 古典籍発見の軌跡とその展望、2016年10月30日、琴浦町生涯学習センター「まなびタウンとうはく」(鳥取県東伯郡琴浦町)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山崎 真克 (YAMAZAKI, Masakatsu)  
比治山大学・現代文化学部・教授  
研究者番号：10342544

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし